特261
528

始

特26/
528

王車國痕

自序

我日の本は古へより梅雨とて挿苗の時期には連旬雨の降りしきる例にて此は國土の地位による氣候の然らしむる所なりといふ、故に梅天陰鬱とも梅霖濕陰とも詩人は形容し梅時喜雨只蝸牛等の句もあり、此際世人は雷鳴の早からんを祈れり、之れ雷鳴りて斷梅するとの古諺あるによれり。

今年丁丑の六月十四日久邇宮第三王子邦英王殿下は妃殿下と共に我が坂田郡の史蹟を御歴訪あり、京都帝國大學總長濱田青陵博士、下鄉久成氏等同道さるゝとの吉報は月の初めに伊吹山房に落ち來り、其日雨ならんには十七日に御くり代へあるべしとのことなれば、伊吹の裾野

さるゝを報ぜられたり、鶴首半歲にして愈々其日は月の十四日と報ぜられ、其順路は建武中興の策源地にして且つ六波羅北條一族の終焉地なる番場驛蓮華寺を始とし、醒井養鱒場、元弘の忠臣北畠具行卿の墓、其昔武名に輝く近江源氏佐々木京極家の菩提寺淸瀧寺に在る寶篋印塔の群集地や京極高次の石殿、景行天皇の皇子日本武尊の御征伐ありし伊吹山の古代夷族の遺品が近年頓に出土せる國史上の問題に係る遺品をも見學し、夫より長濱町下鄕共濟會所藏三千餘種の石器や彌生式土器、繩文土器等を巡覽さるゝ順序を送り寄せられたり、扨て此の東伏見伯爵閣下は臣籍降下後の御稱へにて實は久邇宮第三王子邦英王殿下にまし〳〵、竹の園生のやんごと無き貴顯にまし〳〵、先年京都帝國大學の文學科御卒業後は考古學に御趣味深く依て濱田總長御同伴の御巡察となりしものなり、明治時代には我近江の國は石器の出土も極めて少なき國と云はれ來りしが、大正以後鄕土歷史研究の進むにつれて此處彼處より續々古代遺物の出土を報じ、終には天下の珍と賞さるゝ奇石器や長き石劍、石棒、多頭石斧等の發見さるゝあり、伊吹山下の村々より出土する石器土器は既に一百餘點を數へ、矢合宮や勝居宮の古代祭祀の所以さへ推想されて二千年の宿霧を披きて古代の寶庫に入るの感さへ湧出するに到れり。嗚呼古へ日本武尊の御征伐地に今又やんごとなき貴顯の御巡視とは古今を對照して感慨の量り無きものあり、時も時昨年以降坂田郡敎育會は郡志改纂の進行中にて郡內所々より出土せる石土の古代遺品もあればそれ等も併せて我伊吹山房に陳列して喇覽に供し奉らばやと一決したり、斯くて十四日は來れり時は梅天に入りたるも天公は雲を拂ふて貴賓の尊臨を歡迎するものゝ如し、これより先き月の七日に電報により下鄕傳平久成君と長濱町なる共濟會に會見し、其の鐘秀館所藏の千種萬類の陳列を整理し御案內の順序等を一決しあれば、十四日午前十時山人は先づ番場驛に到り玉車の來るを待てり。

番場蓮華寺

番場は中山道六十九驛の驛次にして日本三關の一なる不破關西口の驛路なり、驛を西南に進めば磨針嶺の險に達し交通の要衝として嶺下には矢倉の設けさへありし古要砦なり、八葉山蓮華寺は時宗一向派の大本山にして遊行上人に創まる念佛道場なり、土地の豪族土肥道日入道の開基にして弘安七年鑄造の古鐘は國寶に列し朝夕に七百年外の清韻を傳ふ、此日沿道は清掃され境内一塵を留めず村人襟を正して待つ、午前十時半菊花御紋章の玉輦は快輪を列ねて門前に着す、閣下御夫婦帝大の岸興詳書記下郷久成氏等一行下車さる、我等は僧俗及び小學校教師生徒等と門前に歡迎して一禮し靜かに門に上る、此番場驛は實に建武中興の策源地、又光嚴帝、花園上皇、後伏見上皇、皇太子康仁親王、幷に伏見天皇の皇子尊圓法親王等、六波羅に在ませし貴顯の行在所である上に、更に元弘三年五月九日六波

番場蓮華寺

上　鐘　樓

下　紀念樹御手植

羅の將北條仲時以下四百三十餘人が進退谷まりて此の一向堂前に屠腹して壯烈なる最後を遂げたるは我國史上著名の舊蹟にして其鎌倉武士の壯烈は血流れて川を爲す慘絶さに今に血川の稱を門前の小川に存し、寺僧同阿が其姓名年齢を記せし所謂蓮華寺過去帳は我邦唯一の國寶鬼簿にして、四百餘輪の塔婆は山中に整置して目のあたり悲史を傳ふ、予が茲に此番場を建武中興の策源地といひ、一帝二上皇の行在所といふに就ては此機會に稍説明せねばならぬ。

抑々六波羅北條氏の一族が此番場の山峽に來つて壯烈なる最後を遂げたることは太平記や梅松論等に記されて昔より著名なるも、事茲に到りし源泉に就ては世人之を知るもの少し、元弘三年春隱岐國の行在より窃に遁れて伯耆の船上山まで移り給ひし後醍醐天皇が名和長年の勤王により綸旨を諸國の武士に下して勤王の將士を召し給ひし時、後には逆臣となり凶賊の名を遺せる足利尊氏も此時は天皇の綸旨を請けて西上の途に番場驛にて近江の守護京極高氏入道道譽と會見し天皇

に歸順の協議は二人の間に一決し、尊氏は四月の二十日過に京都に上りて直ちに丹波篠山の八幡宮の前に於て天皇に歸順の旗揚を爲し、志を同じくするものは直に來り會すべしと告げたれば近畿中國の勤王武士は競ひ來り會したれば、五月七日の夕に尊氏は京都に進み入り直に六波羅北條氏の巣窟を攻擊して北條仲時同時益以下を破り、其逃ぐるを追て近江に逐ひ入れ八日の夜は蒲生郡の觀音寺に一宿し、翌九日には觀音寺より出でゝ神崎愛智犬上と中山道を北進して坂田郡に入り磨針嶺の險を越えて番場驛に着いたのであつた。

番場には尊氏と戰略を議した京極道譽が伊吹山の太平寺に在ます五辻宮守良親王を奉じて主將とし近江美濃伊勢三國の武士を招きて不破の關以西の峽谷に集め東國北國への各道を塞いで六波羅北條の落ち來るを待ち居るのである、乃ち尊氏は北條仲時以下の一隊を逐ひ來るし道譽は網を張つて其來るを待ち受けて居たのであつた、北條時益は近江に入らぬ先に山城の四の宮河原で討死し、仲時が殘兵を率ゐて遁げ來る途次には更に近江の土兵の爲に攻殺され漸く少數となりて番場に來りし時は僅に四百三十餘人となり、最早戰ふ勇氣も無く辛うじて奉じ來つた光嚴天皇、花園上皇、後伏見上皇、皇太子康仁親王に悲しき御別れを告げ奉り、又天皇に從ひ奉りし數人の公卿をも同じく守良親王に御任せして一向堂前に四百三十餘人が割腹して壯烈なる最後をしたのであつた、守良親王は北條氏の滅亡を多賀神社に祈願し四月の祭禮の夜は社前に通夜を爲して宿願を爲し給ふた程であれば、北條氏滅亡の翌日には光嚴帝兩上皇皇太子等を伊吹山の太平寺に奉じて守護して居る間に、新田義貞が鎌倉の北條高時を亡ぼし、後醍醐天皇が京都に御還幸遊ばし、茲に建武中興が出來たのであつた、光嚴帝等貴顯一行は五月二十五六日頃に還京されたれば太平寺御逗留は二十日餘りでありました、蓮華寺は實に斯かる歷史の大舞臺にて啻に六波羅北條氏のみの史蹟では無いので此の大切な史蹟なることは今少し世人にも知らせたいと思ふのでありますと說明し、夫より伯爵

に從ふて鐘樓に上り先づ弘安七年の銘文、鐘面の模樣、龍頭、撞坐等につき時代模樣の特徴を說明申上げ一杵又一杵、曾て詩人藤井竹外が攝津鶴滿寺の鐘を聞くといふ題にて詠せし詩に「聽得一千年外聲」の結句あり、今此鐘聲は「奬君七百年前聲」とでも申す可き古鐘なり、猶此の番場には今は亡びた正福寺にも弘安六年の古鐘があり中古寺の衰亡により轉々して今蒲生郡八幡町の南桐原村赤尾の覺永寺に移轉して存在されてある、此の蓮華寺の古鐘は大正七年國寶に編入されながら毎日朝夕に七百年前の聲を放つて韻々の音を鄕人に傳へて居る、松風颯々心神共に凄然たりと說明し終つて堂に上り住職の挨拶もあり淸僧の獻茶後、過去帳の說明を爲す、住職は千歲一遇の好期希ふらくば本堂前に紀念樹の植栽を給はらんを請はる、閣下快諾手づから松樹を植ゑられ保子夫人も傍に進み陪し給ふ、紀念撮影終り一行は門を辭せんとす、山人曾遊の詩あり記憶の今に新なるものあれば附加することゝせり。

敗殘亡命番場驛　咫尺山河盡敵兵　四百餘人齊伏刄
千秋留得血川名
回顧當年欲斷魂　秋風落日馬場村　三皇駐輦蹤安在
重問殘僧默不言

醒井養鱒場

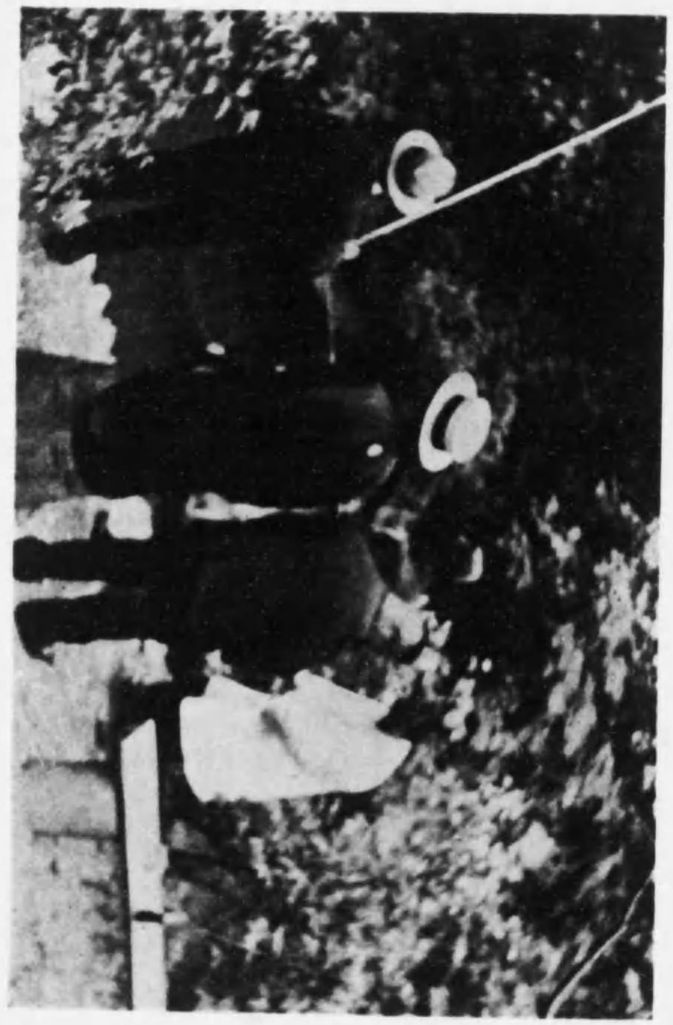
醒井養鱒場は其村の東南に當る丹生の溪流淸き所に設けらる、番場より一里半快車一走溪風衣襟を拂ふて涼し、凡そ二十分にして其の香露園に入る、場は滋賀縣營の養魚場なり、明治十二年八月內務省勸業局の創設爾後場主を替ふること二三にして遂に縣營に移る、里人は東洋一と稱す自己喧傳にあらざる歟、曾遊の德富蘇峰翁は諸國の養魚場に到れば何れも東洋一と稱す養魚場は皆東洋一かと一笑されたることあり、但し一縣の直營なれば年と共に設備も漸く整ひ池中大小の鱒

魚は潑溂として滿池に飛び躍る、此時濱田京大總長安着せらる、博士は昨夜九時朝鮮より歸られしにより一行より後れ別に汽車にて米原驛に下車されし爲なり、是に於て豫定の一行は揃ひたり、養魚池方圓二十許りを巡覽す、魚の大小を以て池を分ちて養ひ恰も小學敎育の學年を分つに同じ、小は生後半月計りのもの、卽ち一年生なり、大は長大二尺を越るもの、既に大學生たり而して在來の邦種、歐米舶來の青紅各色の鱒魚は混合して一場に群を爲す、是亦世界同居なり一握の餌を投ずれば幾千百の養魚は群集して之を競ふ、恰も寺社の落慶式等に於る餅撒に似たり、一絕句あり曰く

山北峽南池又池　水中幾萬養魚兒　幼纔近寸長二尺

一族團欒生事滋

香露園に午餐を爲し更に下流に車を停めて鈎竿を試む、閣下夫妻巨鱒鈎に上ること頻々興に入らせ給ふ、時刻豫定に後るゝこと一時間斗り峽路車を走らして柏



（端左）釣　垂　爵　伯　場　鱒　養　井　醒

原村に着す、沿道の綠樹滴るが如し。

北畠具行卿墓

先づ元弘忠臣北畠具行卿墓に詣づ、村長山根敏三校長西秋實郎教員兒童等整列歡迎坂路墓前に着す、村會議員區長等紋服嚴めしく出て迎ふ、正式參拜終り、山人は塔銘につき說明せり。

具行卿は後醍醐天皇東宮に在ます頃より親近され御卽位の後は常に側近に召されて奉仕し、元弘討幕の御計畫には參謀長として綸旨を諸國に下したる等の功績は大なりしも、元弘元年八月天皇討幕の計漏れて車駕笠置に御幸の時卿は扈從し笠置敗戰後天皇と共に艱苦を嘗められしが、功績の大は敵には罪科の重きに問はれ、同二年六月此地に於て斬殺されたるにて忠魂は長へに護國の鬼となり、數百年を經て明治十一年十一月天皇の御巡幸に勅使御差遣のことありて後其荒墳は修

せられ、元弘忠臣の墓所として名高く、近く里人は神社を建立して忠靈を祀らんと計畫中なり、「逍遙生死、四十三年、山河一革、天地洞然」の辭世の偈は當年追懷の悲酸史料とす、柏原は山人に於て居村たり、一年幾度奠墓す、曾て建武中興六百年祭の時の小詩二首あり、猶記憶す。

鴻業回天志未酬　致身凶手恨何休　斷碑落日柏原驛
忠臣葆光六百秋

忠臣碑畔瑞雲封　老樹參天黛色濃　聖世恩光嚴祭享
遺勳隆比膽吹峰

清瀧寺佐々木京極家の墓

やがて坂を下りて清瀧寺に着す住職山口光圓師村人等と山門に出て迎ふ、參道は濃綠楓樹の隧道を爲し人々顏皆青からんと欲す、上りて先づ京極家の墓所に入

清瀧寺京極家墓所臨地說明

る、初祖佐々木四郎左衞門尉氏信以來の墓碑は何れも寶篋印塔にして墓域の上區に十八基を列ね皆時代の特色を見る、此時山人閣下夫人に言上す、貴夫人は元石見國津和野藩主龜井伯爵の御令嬢なりと、果して然らば今日京極家の墓參は御祖先の展墓なり、龜井家は佐々木義清を祖とさるゝも後には佐々木尼子家と姻戚を重ねらる其尼子家は京極家の分流にして犬上郡尼子庄を領し依て尼子を稱す、應仁文明亂以後尼子氏分れて二家となり近江に居るを江州尼子といひ、出雲に分居するを雲州尼子と稱せり、龜井家は雲州尼子の御族なりと、下鄕久成君傍にあり令夫人樣それでは當寺から御寄附を賴まれますかも知れませんとて各一笑されたり、下の墓區には關ヶ原戰前大津籠城を以て西軍の攻圍を受け高野山に逃れたる京極高次の墓は石造廟を以て考古學者に賞讃さるゝもの、以後讃岐丸龜藩主として代々の墓を列ね、又東側には分家多度津京極氏の墓を列ね江戸時代の製作に係る寶篋印塔十數基あり、二十年前故關野工學博士此墓に至り其稀觀を喜び我邦寶

篠印塔の時代研究上唯一の所なりと云はれたり、今日濱田博士も同感の讃辭を下さる、寺に入り御像殿を拜し、坊に移りて庭園の規模廣大にして自然の景を應用したる雅致幽邃を賞し、京極道譽以下の文獻を見る、具行卿は京極道譽の同情にて此寺に在ること殆ど一ヶ月、鎌倉への嘆訴も許されざりし爲に終に元弘二年六月十九日此地に於て自若として凶及に殪る、山人此寺に於る舊作あり曰く

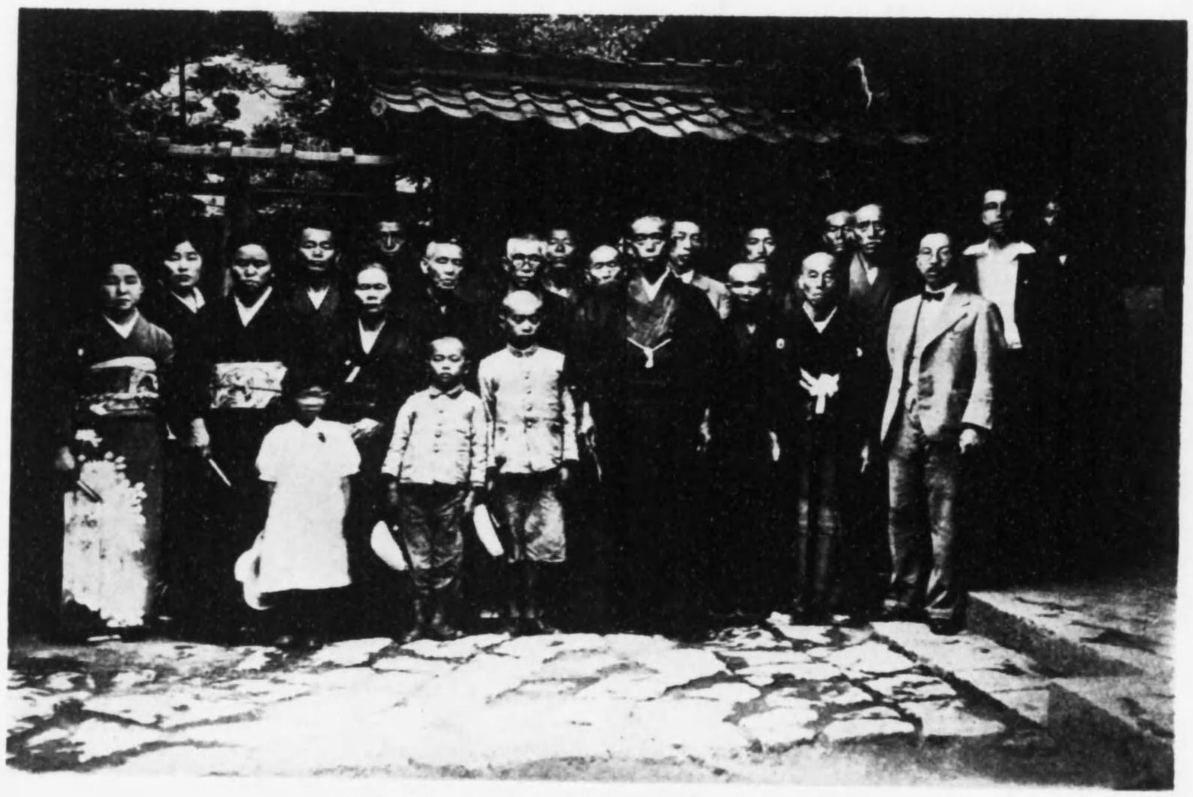
清瀧寺懐北畠具行卿往事

虜身何又説先功　一笑山頭月如弓　櫻花有意清瀧寺
不待明朝散晩風

夫より菊花御紋章を印する自働車を先頭に道を伊吹山の方向に進むること凡そ十分許り、矢合宮の東側に車を停め愈々殿下の閣下は伊吹山房に入り給ふ。

伊吹山房と山下出土の古代遺品

右より京都帝大教授記念碑前、光厳天皇記念碑、光厳和尚、二条大納言、光厳天皇、光厳和尚、光厳天皇、光厳和尚、光厳天皇、光厳和尚



伊吹山房接伴諸氏紀念撮影

大字大野木は東西合して一百四十戸の寒村十の九は農を業として今挿苗の盛時なり、御車の通ずる處早乙女は笠を脱ぎ男子は帽を捨て業を停め路傍に跪して合掌禮拜するを見たり、伊吹裾野の寒村に皇族の御車を迎へ奉るは日本武尊以來の盛事にして郡教育會の諸氏親戚知友村人や更に遠隔の知友等も馳せ來りて何れも襟を正して出て迎ふ、山房に陳列する石器土器は無量壹百十餘種、濱田博士は閣下と共に子細に巡覽批評され、中にも一尺三寸餘の石劍や類例少き奇石器、多頭石斧、石臼、石灰石製の曲玉等を賞讃あり、其間又教育會代表樋口元氏は出所出土狀態等につき説明し又品種により質問を爲す等あり、矢合宮の所在と石礫、勝居宮の所在と各種石器の出土等に考へ及べば、雲霧に鎖されし伊吹山下の昔を無言の土石の出土によりて三千年前の聲を聞くの感ありと、御趣味に長け給ふ閣下も御興に見請られたり、巡覽終らせ給ふ、山人御前に進み進ずる處の晩茶と草餅につき説明し且つ窓前に當る伊吹の秀嶺を指し、伊吹山人の住居は伊吹山を我有

として晴に雨に霜に雪に朝夕禮讃し、其不動の雄姿は七十年來山人の師と仰ぐ所なり、先年久米邦武博士山堂に來遊あり此景を望み「門入(ニハル)江州第一山」の句を額字に書されたり、窓頭に伊吹山を仰ぎ室内に山下出土の石器土器を排列す、茶も餅も是れ皆伊吹山下の自製なり、請ふ本日は伊吹山を滿喫なし給はらん事をと、閣下も夫人も嫣然微笑し給ふ、下郷久成君曰く、伊吹山人終始此山堂に坐し郷土歴史に筆を揮ふこと三十餘年舊著斯の如く山堆す、彼の函はその原稿なりと指し説かる、山人恐懼穴もあらば入りたき心地せり、露路門頭紀念撮影を許され、夫より又車を列ねて長濱町に向ふ、醒井警察署の揖斐部長は部下巡査と共に此一日を閣下の護衛に終始され、前驅姉川々畔古戰場に至り管轄區域終るを以て引返されたり。

姉川は元龜元年六月の古戰場、南方には横山城趾を望み、北方には淺井長政の本城小谷城趾を中央に、左には虎御前山、右には大寄山、雲雀山等が當年の戰圖を其儘に展開し、川の右岸に近き野村は信長と長政との會戰場、其西に見ゆる三田村は德川家康軍と朝倉義景の援軍との決戰場で鮮血に染つた血原の遺蹟、又遙かに山本山から北に走る山脈中の高峰が七本槍で名高い賤ヶ岳の本丸で、近世史上の英雄の戰跡は指顧の間に展開さるゝを見ながら坦道を長濱町に進み、西本町の下郷共濟會に着せり。

下郷共濟會鍾秀館の御巡閲

下郷共濟會は長濱町の富豪下郷傳平久成氏の經營する所、其創立は先代傳平久道君の遺志により開かる、傳平久道君の家は元と餅屋を業とす、久道君性剛膽大傳家の業は家人等に任せ自ら志を立てゝ商界に奮闘し席暖かならざること多年、漸く雄飛して益々榮達され遂に財界の麒麟兒と稱さる、是に於て世人の呼稱せる餅傳は金持の持傳となり同町同時代の成功者淺見又藏氏と併せて長濱町の双鶴と稱

さる、其成功するや仁慈の志厚く社寺若くは各種慈惠事業に巨額の金を喜捨し寄附救濟の事績少からず、遂に推されて貴族院議員に當選したり、剛毅沈着奮勵發展慨に立志傳中の人なりき、故に共濟會を建設し社會事業に盡さんと志せしに天此人に壽せず依て遺命して逝けり、是に於て久成君が父の遺志を繼ぎ大正四年御大典紀念として共濟會館を建築され十一月十日を以て開館されし所にして山人は其當初より多少の緣故を有す、當時會の事業として長濱町史の編纂の任を帶びしを以てなり、其後會は更に同境内に三階の鍾秀館を建築し、家寶を始め美術品、考古學資料に關する物等を陳列せられ江州に於る無二の博物館なり、更に同境内に明治天皇の行在所一棟を移築さる、此の行在所は元と大阪製紙場に新築されしものなり、加ふるに此の地は羽柴秀吉長濱築城當初より功勞の町豪吉川、下村、川崎三名家を三年寄と稱せし其一人なる下村玄蕃助の邸にして邸地既に歴史的に尊し、邸の東南隅に群がる積翠の老松は下村家庭園の古樹なり、土地と建物と共

下郷共濟會紀念館遠景

にふさはしき歴史を有し、其鍾秀館内には曾て東京高嶋多米治氏の一生を盡して蒐集せし石器土器三千餘種を購入して陳列さる、此の先史時代や上代遺物は今次閣下御遊覧御見學の目的物の最なるものなり、午後五時半三臺の自働車は共濟會の門に着す、門前男女老少簇ること雲の如し、是れ殿下の英姿を拜せん爲なり、先づ共濟會樓上に上り憩はる、伊吹山は遠望一幅の畫の如く窓前に見ゆ、伊吹山房を去ること三里餘、雄大猶斯の如し、久成君山人に長濱開町の由來を講演すべきを命せらる、是に於て天正二年春絶代の英雄羽柴藤吉郎秀吉が信長の一將として湖涯の要地に築城せし顚末より同十一年四月賤ヶ岳の戰に及ぶ長濱町人の秀吉に對する忠勤により町民に三百石の朱印除地を賞賜されし來歴を詳說し、終つて鍾秀館に入り陳列品を巡覧あり、東西兩洋諸國の石器角器骨器土器等何れも天下の珍にして博士の閣下への說明も審にして目睹耳聞時を久ふす、終りて更に慶雲館に移る、館は長濱港角の要地に在り久道君と時を同くせし町の偉人故淺見又藏氏

が明治二十年明治天皇京都より東京へ御歸輦の日行在所として新築せし所、二世又藏氏によりて更に豪華を加へたる同町第一の名園なり、苔石巨巖翠松綠竹の間太湖の漣波を眺み設備風景兼ね備はる、樓に上りて玉座を拜し席を左室にとりて晩餐を共にす、美祿は玉杯に溢れ珍肴は盤上に堆し、人生の快此一日に盡く、午後九時別を告げて南北に別る、醉眼朦朧家に歸れば家人は猶厨裡に鞅掌して曰く衆客今去れり閣下の玉輦去るの後、村老は短袴短裘農村空前の光榮なりと滿悅し醉歌縱横踏舞堂を動かし歡聲四隣に喧しかりしと、夫より入浴して勞を慰し、端然父母の靈前に坐し本日の光榮は乃ち父母の賜なりと深く海岳の恩を謝し枕に就く、豈是の無上の光榮記して傳へざるべけんや、六十九歳の孤兒翌朝筆を清めて此記を草し題して王車鹵痕といふ。

左に當日閣下の嘗覽に供せし石器土器目錄を表示す。

伊吹山下出土遺物表

種別	完否	發掘又は拾得年月日	場所	個數	拾得者氏名
石灰岩質勾玉	完	昭和三年九月十一日	大野木八相神社附近小字九目田桑畑中より發掘	一	西秋德代茂
磨製石斧	一部未製	昭和三年	大野木小字深谷	一	西秋實郎
石鏃	完	昭和五年六月	大野木小字五反田水田中、八相神社前	三	石村泰三
鐵鏃	完 後風化す	大正十四年九月	大野木藥師山土取の時出土	一	服部七之助
石鏃	完	昭和六年二月	大野木小字今屋敷	一	森田喜作妻
打製石鏃	完	昭和六年八月	柏原小字瀬戸浦	一	小谷見二郎
石斧	完	昭和十年四月	柏原村大字梓河原砂取場	一	吉崎久雄
金環	完	明治四十四年八月	柏原村大字柏原小字狐塚	二	西川瀨太郎
銀環	完	同	同	一	同人
刀子		同	同	一	同人

横瓮破片		柏原村大字柏原小字狐塚	一	西川瀬太郎	二二
蓋坩破片		同	一	同	人
高坩完		同	一	同	人
石棒断片	明治十七年拾得	春照村大字杉澤小字南川	一	樋口元	
石斧稍完	明治四十年同上	同	一	同	人
同	明治四十四年	同	一	同	人
同 断片	大正二年	同	一	同	人
石棒同	同	同	一	同	人
敲石同	同	同	四	同	人
同 完	昭和二年	同	一	同	人
同 断片	昭和十年十月	同村大字門田小字	二	同	人
同	昭和十一年	同村大字出晴小字	二	同	人

石斧同	昭和九年六月一日	同村大字門田池中小字	一	西堀禎三	
石劍同	昭和八年	同村大字自邸地	一	同	人
石斧同	昭和十一年十一月	同村大字出晴小字	一	堤喜三	
石劍同	大正二年	同村大字自邸地	一	宮崎義一	
石斧同	昭和二年十月六日	同	一	山崎柳藏	
同	昭和七年三月二十一日	同	一	同	人
同	同年四月二十四日	同	一	同	人
石鏃完	昭和七年三月十九日	同	一	同	人
同	同年三月二十一日	同村大字小字神明の下	二	同	人
石斧稍完	昭和十年五月	同村大字川西	一	矢森善次	
同 完	大正二年	同村大字小字東川自邸地	一	大澤忠次	
同 断片	同	同	一	同	人

石斧	斷片	昭和十年二月	春照村大字杉澤小字出晴	一	稲村増一
同	同	昭和十一年四月	同 自邸門田上	一	同人
石劍	同	昭和十一年十月四日	同 小字出晴上	一	同人
敲石	完	同	同	一	同人
奇石器	一部斷片	大正二年	同村同字 自邸地	一	西堀常次郎 今。若村源左衛門所藏
多頭石器	同	大正五年四月	同 小字川西所	一	同人上
石斧	斷片	大正七年	同 自邸地所	一	同人
石棒	同	同	同	一	同人
石斧	同	昭和四年四月	同 小字川東所	一	藤田吉次
同	同	昭和十年四月	同 自邸前道路中所	一	同人
石棒	同	大正三年三月	同	一	同人
石刀	同	明治四十年頃	同 所	一	宮崎武雄

石臼	稍完	同年頃	同 小字南川畑地下四尺所	一	同人
石棒	完	昭和十一年十月四日	同 勝居神社前(出晴)所	一	同人
敲石	斷片	同十年十月八日	同	一	同人
石棒	同	明治四十年頃	同 小字川東自邸地所	一	大澤忠次
同	同	大正二年頃	同 小字門田所	一	同人
石斧	完	同	同 小字川東所	一	同人
同	未製品推定	昭和十一年十月八日	同 小字出晴所	一	樋口元
石棒	小形完	昭和十年五月十五日	同 自邸前道路工事中出土所	一	丸本留吉
敲石	斷片	昭和十一年十月四日	同 小字神明下川底二尺五寸所	一	辻村彦輔
同	同	同年三月	同 小字川東地下二尺所	一	同人
石斧	斷片	昭和十年十月	同	一	同人
石棒	同	同	同	一	同人

石斧	断片	明治四十年頃	春照村大字杉澤小字同自邸地	一	藤田吉次
同	同	大正二年頃	同所小字同畑四一四番	一	同人
同	同	大正十五年	同所小字同一六番地先	一	同人
同	同	昭和四年三月	同所小字同四一四番	一	同人
同	同	昭和九年四月	同所小字川西	一	矢森善次
同	同	昭和九年九月二十日	同所小字川東	一	要石良三
同	蛇紋石 完	昭和九年六月二十三日	同所自邸地	一	辻村義男
敲石	同	昭和十二年四月	同所小字南川	一	大澤辰次郎
石斧	断片	昭和十二年五月十一日	同所眞樂寺地内	一	辻村彦輔
敲石	完	昭和十一年十月八日	同所小字神明の下	二	同人
同		昭和十二年二月	同所	一	大澤辰次郎
石刀	未製	昭和十二年五月	同所小字北川	一	矢森善次

石棒	断片	大昭和十二年三月三十一日	同村大字大清水	一	兒玉敏太郎
石斧	完	明治末年	同村大字上平寺		谷口太郎
彌生式土器	破片		東黑田村大字北方		寺村眞一
石棒	完	昭和二年八月	鳥居本村大字佛生寺川中	一	鳥居本校
石斧	完	昭和二年一月	同村大字鳥居本小字四ッ目屋敷桑畑	一	同
敲石	完	同	同	一	同
兜		天保三年四月	同所小字れぶた神	一	
古鏡		同	同所	二	
坩		同	同	二	
石鏃	完	昭和七年四月（拾得）	西黑田村大字薗原小字椎山	一	池野惣一郎
蓋坏の下半身		昭和六年一月十八日	同所	三	布施（薗原小字布施）共有
蓋坏		同	同		同

高坏	昭和六年一月十八日	西黒田村大字薗原小字椎山	三	布施共有（薗原小字布施）	二八
坩 完	同	同	二	同	
同 破片	同	同		同	
提瓶	同	同	三	同	
甕	同	同	一	同	
平瓶	同	同	一	同	
蓋坏 完	同	同	三	同	
鐵鏃 斷片	同	同	數個	同	
曲玉（瑪瑙石）	同	同	五	同	
水晶切子玉	同	同	一	同	
米粒形紺紫色管玉様のもの	同	同		同	
青色粒玉	同	同	十六	同	
銀環	昭和六年一月十八日	西黒田村大字薗原小字椎山	二	布施共有（薗原小字布施）	
同 完	昭和十一年四月	同 古墳附近地下九尺所	一	池野惣一郎	
坩（小） 稍完	同年十二月	向 小字野上の下所	一	小澤芳藏	
古陶器坏	明治四十五年三月	同村大字本庄 熊岡山麓川底	一		
蓋坩	同年頃	同 小字列見寺附近所	一		
同	明治四十五年三月頃	同村大字鳥羽上 小字堂山	三		
金鎖	昭和十二年	同 小字赤塚所	二		
石斧 稍完	大正年間	六莊村大字高田 小字頓川	一	中川與惣松	
石斧 斷片	昭和七年三月	同村大字平方 小字三反田	一	同人	
石斧 斷片	昭和九年	同 小字屋敷方所	一	中川與惣松（石原氏拾得）	
同 完	昭和七年八月四日	同村大字田村 小字前川	一	中嶋喜平	
同 斷片	同年十一月十八日	同村大字勝村 小字下の切	一	同人	

石斧斷片	昭和八年八月七日	同村大字平方小字中久保	一	中嶋喜平
同　同	昭和九年八月二十三日	同小字矢の町所	一	同人
同　同	昭和十年五月十六日	同村大字勝村小字江竹	一	同人
同　同	昭和十一年四月十六日	同村大字大成亥小字鴨田	一	同人
同　斷面	昭和十一年四月二十五日	同村大字勝村小字喜助	一	同人
同　斷片	同年四月十六日	同村大字平方小字中久保	一	同人

紀念詩と詩友の次韻

空前の光榮に浴せし伊吹山人は此の喜びを傳ふ可く翌朝三絶句を賦して野田駕橋氏の雜誌友園に投じたれば、同紙詩壇の老將尾形楓峽、蓮井露香氏を始め諸詩友の次韻詩は續々寄與されたり、されば原作と併せて編末に登載し一は以て諸氏の芳情に酬ひ一は以て其好意を傳ふることゝせり。

光榮紀念　三首

膽岳拂雲黛色長　薫風吹入讀書堂　門迎玉葉金枝客
寵眷餘榮千歳芳　輕轢彫輪入我門　短袴短裘村老躍
夢耶鸞鳳下田園　山人感極泣殊恩
山人感極泣殊恩　十里田園挿苗期　駕描金菊映林池　幾群父老跪途側
一種勸農鴻典儀

奉和中川章齋老契記喜原韻

楓峽　尾形　慶浪越

擔舒蘊蓄歳華長　修史功成不出堂　誰料王侯來聽講
一門聲譽有餘芳
洗竹澆花數畝園　掃除荒徑始開門　幾回巳辱王家謁
更迓雲車拜寵恩

惠風慈雨不レ違レ期　水足稻畦通二沼池一　公子親臨田畯扈
百年父老看二威儀一

丁丑六月中旬、東伏見伯爵被レ枉二駕伊吹山房一、々主
章齋中川君、賦二三絶一紀レ喜、余次二其韻一乞レ政　露香　蓮井知城　栗太

鄉史編修歲月長　王家愛レ士訪二山堂一　薰風六月伊吹麓
令譽彌兼二藥艸一芳
種レ竹栽レ桑五畝園　晴耕雨讀舊家門　何圖王族親臨在
感泣千年記二寵恩一
門迎二高貴一恰農期　人在二秧田一水溢レ池　穿レ袴說來膽山史
章齋仙士肅二威儀一

丁丑六月、東伏見伯爵臨二中川泉三氏之伊吹山房一
有二史蹟探聞之事一、氏賦レ詩頒二其光榮於知人一、予亦賦二
七律一章一、以贈　駕橋　野田現淨　日野

修史樓高風拂レ帷　貴賓枉レ駕漏聲移　醒泉水漾當年碧
膽岳雲存太古姿　大將停レ鞍抽二猛士一　上皇賜レ像闢二崇祠一
肅二酬下問一感無レ極　一代光榮竹帛垂

次二伊吹山人翁詩韻一　伍洲　西出五右衞門　野洲

柏原北入一溪長　十里青山繞二草堂一　史就門迎二公子駕一
辱二將聽講一姓名芳
盛矣清時翰墨園　王家好レ學遠敲レ門　一鄉雀躍俱瞻仰
亦是文勳拔擢恩
田々總屬二挿秧期一　燦々影輪傍二曲池一　眞是武尊以來事
鄉民稽顙拜二威儀一

次二中川泉三翁王子親臨所感詩韻一　中莊　藤澤道夫　神戸市

伊吹山路一條長　王子驅レ車臨二艸堂一　咫尺尊前語二郷土一
主人令譽萬年芳

双鸞來下碧桐園　頓覺瑞雲籠二筆門一　千歳光榮輝不レ滅
宜哉山叟泣二殊恩一

門迎二鸞鳳一距相期　瑞靄祥光照二碧池一　翁媼合歡投駕轄
南風薰處拜二成儀一

東伏見伯、惠二臨伊吹山房一、々主中川泉三君、感激賦二
三絶一、示二同人一、乃次二瑤韵一謹呈　弊山　瀬川　徹　平安

膽山滴レ翠白雲長　遠浸二湖光一映二草堂一　修史多年功正就
一朝上聞姓名芳

薰風冉々度二林園一　貴客停レ車處士門　史蹟說明酬二下問一

裁二詩三絶一記二高恩一
今日光榮誰敢期　鸞車序列映二田池一　一郷父老轍前跪
恭拜金枝玉葉儀

奉呈中川章齋先生玉詩次韻伏乞正　松琴　谷村　伊平　濱川

膽山聳處一溪長　習々薰風入二艸堂一　幸列二君家迎鳳典一
光榮於レ我有二餘芳一

王車轣轆進二田園一　直入二膽南名士門一　報國文章三十歳
功勳今日見二殊恩一

田園恰是挿苗期　慈雨全晴水滿レ池　金菊鳳輪光萬丈
閭村野老拜二盛儀一

東伏見伯爵夫妻與二濱田京大總長等一駐二駕中川翁邸一、

被レ視二伊吹山下出土之石器土器一賦二一絶一以祝　秋水　中川原金人

玉葉賓留黄菊車　衡門此日彩二祥霞一　晴耕雨讀多年績
養得文壇不滅花

同　上次韻　臥牛　澤　直一

十里田園野趣長　王車忽入讀書堂　光輝百丈終無レ滅
千歳之花千歳芳

歩二玉韵一賦呈二章齋先生一　耕雲　田中豐文　虎姫

翠巒重疊白雲長　遠繞山人舊草堂　史就一迎二公子駕一
文名千古世流芳

五月薫風日正長　伊吹山下舊書堂　主人閉レ戸修二郷史一　醒石　野田勘右衛門　岐阜

台覽重回名姓芳
車聲轆々過二田園一　直指山村長者門　父老歡迎皆拜跪
太平餘澤感二殊恩一
霖雨漸晴秧挿期　琉璃碧水滿二田池一　勸農自是聖朝旨
鸞駕夫妻並二羽儀一

王子中川家に親臨したまふを聞きて　藤澤道夫　神戸

遠近の史の蹟をはさくりたる人なれはこそ王のとふらめ
君か家の高きほまれを仰き見て伊吹山をもひくしとそおもふ

筆を擱くに際し今次伊吹山下を始め坂田郡各地出土遺物が斯の如く光榮に霑ひし裏面には下郷久成君の指導後援ありしを附記せざる可からず、隨て其一族の下郷良順、横田立次郎、山田五三郎の諸君、文庫長長義堂君、谷口書記並に家從角

川榮藏君等が終始諸般の設備や待遇に鞅掌せられ萬遺漏なきを得たることなり、空前の光榮に浴せし伊吹山房主人は茲に滿腔の謝意を表す。

王車鹵痕　終

昭和十二年九月十五日印刷
昭和十二年九月二十日發行　非賣品
著作兼發行者　中川泉三　滋賀縣坂田郡柏原村大野木
印刷所　内外出版印刷株式會社　京都市下京區西洞院七條南

終